

雑誌『国民文学』研究：
不協和音を奏でる「英雄」たち

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-04-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 南, 富鎮, 松下, 玲音 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00009375

雑誌『国民文学』研究

——不協和音を奏でる「英雄」たち——

南 富鎮・松下玲音

1. はじめに

『国民文学』とは、1941年11月から1945年5月の間に、朝鮮で月に一回刊行されていた文芸総合雑誌である。この雑誌は、崔載瑞主宰の『人文評論』と、李泰俊主宰の『文章』が統合されて誕生した。朝鮮語版と日本語版を交互に出版するという「過渡的体制」での計画は、創刊間もない1942年5・6月合併号にて全面日本語版とする方針に転換するが、これは朝鮮への徴兵制実施決定と「国語」普及運動という時代の要請に応えようと努力した結果である¹。特徴としては、巻頭頁に、1942年2月号を除き最後まで「皇国臣民の誓詞」が掲載されている点、主に知識階級向けの論文や小説が特集されている点が挙げられる。上述のとおり『国民文学』は、1941年12月8日勃発のアジア・太平洋戦争の直前に創刊され、戦争の終結が目の前に迫った1945年5月に刊行を突然終える。植民地期朝鮮で、さらに戦時下に、当時の文人の作品発表の場として存在価値を持っていた雑誌は、頁数を切り詰め、ぎりぎりまで刊行を続けていたのである。

雑誌を支える書き手、編集者は、「理想」を掲げて『国民文学』を作り上げ、読み手に、もしくは自分たち自身に捧げていったが、言語政策や目指すべき「理想」文学への道はすべて「過渡期」の段階にあるため、議論が空回りすることになる。それでも国策や時代の流れをなんとか汲み取ろうとしてもがく文人たちの苦悩が記録されている²。本論では主に、こうした文人たちを取り巻く環境と、その環境に囲まれながら生産されていった作品の中身を考察する。

まず本論では、作家に焦点をあて、当時の文壇が抱えていた問題から作家にどのような要請がなされていたのかを探る。次に、編集者、作家、読者それぞれの言語環境に関わる問題を取り上げる。そして雑誌に掲載されている小説をテーマごと集め、分析を試みる。以上を論じた上で、終章では、全体の雑誌に現れた時代の雰囲気考察する。混乱を極めるこの『国民文学』誌が生まれた背景を、明らかにしていきたい。

2. 作家への要請

まずは、『国民文学』誌上において文学を生み出す作家、それを読む読者に焦点を当てる。本章では、政治性を持つ文学を国策宣伝の道具として扱う流れの中で、作家にどのような要請がなされていたのかを考える。具体的には、朝鮮の地方色に関する問題と、国策迎合・時局便乗に関わる問題に分けて考察する。

雑誌上では、これからの朝鮮人作家、在朝鮮日本人作家がどのような心構えで作品を書いていくべきか、時局に対してどう行動を取っていくべきか、ということが頻繁に論じられる。そしていつも、どんな問題に対しても、作家が「よき国民文学者」³であれば自ずと解決されるだろうという結論に終わる。

¹ 崔載瑞「朝鮮文学の現段階」(『国民文学』第二巻・第七号)、1942.8、p.13

² 『国民文学』が目指した「過渡期」における「理想」の側面については、拙稿「雑誌『国民文学』研究—〈理想〉の文学への道」『人文論集』66-2号(静岡大学人文社会科学部、2016年1月)に述べている。

³ 李無影「加藤武雄先生へ」(『国民文学』第二巻・第四号)、1942.4、p.71

この「よき国民文学者」になるには、「皇国作家的世界観」⁴、「日本の世界観」⁵を、無意識の段階にまで身に刷り込ませなければならない⁶。この世界観は、「日本民族の伝統精神であり、戦時下の国民としての決意であり、新しい皇国臣民としての意識のめざめ」⁷と具体的に説明できる。

反対に解釈すれば、日本に対して抵抗精神のある作家は、いくら国策に賛成する作品を書いたとしても、表面的な主張としか見られないということになる。よって作家には上記世界観の樹立が要請されることになる。しかしこの結論は、日本側と朝鮮側、国家側と作家側とでそれぞれ異なる論理によって導き出されたものである。

そこではじめに、作家は朝鮮文学の地方色をどのように作品に反映させるべきかという問題を、それぞれの思惑もふまえて見ていくことにする。ここで対象とされている作家は、主に朝鮮人の作家である。この問題には明確で具体的な結論は出ないが、作家が日本国民としての自覚を持っていれば、地方色など出ていたとしても気にすることは無いという論に集約されていく傾向がある。つまり、朝鮮の特殊性、ローカルカラーを意識して出そうとするのでは反日思想になりかねないから、まず、作家が国民（日本人になった）という自覚を持てばよい、そうすれば作品にも「自然な形で」朝鮮色が出せるであろうというのである。そして、そのようにして出た地方色なら認めてもよいのである⁸。

この意見で日本人と朝鮮人が一致した背景には、それぞれ異なった思惑があると思われる。まず、日本人側の意図は、総督府保安課の松本泰雄の以下の発言から読み取れる。

朝鮮の文人は御承知のやうに…〔中略〕…受動的であるか、或は悪い意味に於いては英雄主義的であります。彼等は色々な感情的わだかまりもありませう。または体面といったやうなものもありませう。併し彼等を本当に非常時局に於て、国防文学の前衛として活用するには、言過ぎかも知れませんが先づ彼等をして積極的に出でしむべく当局の腹を示してやらなければならぬと思ひます。朝鮮の文人には或る程度まで現実に於ける生活にびつたり合ふやうな、即ち郷土文学といふものを認めてやつて、形式的にはさういふ形を取らして、内容に於ては飽くまです皇道精神、内鮮一体といふものを織込ましめる、さういふやうに仕向けた方がよいのではないかと思ひます。今までは思想的に前科があるからと言つて煙たがり、さういふ人の作品を非常に危険視し、またはさういふ人に筆を取らせることを危く思つてをつたのでありますが、朝鮮文人の最も人気のある人はさういつた方面に多いのでありまして、彼等を本当に国防文化の重鎮として働かせるには、或る程度まで当局は積極的に彼等に筆を執らし、指導すべき点は指導し、是正すべき点は是正して、本当に文筆奉公に邁進させた方が、最も賢明な方法ではないかと思ひます⁹。

日本側としては、朝鮮に反抗的なムードを作りたくないため、抵抗的朝鮮人作家を寧ろ利用しようという意図があり、作家への懐柔策として見える。

一方、朝鮮側、特に雑誌主幹の崔載瑞や、同じく編集側の金鍾漢が主張している思惑は、日本側とは正反対である。当時金鍾漢は「新地方主義」という考えを提示していた。これは、中央と地方といった従来の対立構造を改め、中央も含めすべての地域を対等と見なす、地方の独自性を尊重した考え方である。つまり、枠内での抵抗を試みているのである。許された範囲内でなら地方の独自性は許されるという意見は、朝鮮側からしてみれば「合法のわく内での同化拒否宣言」¹⁰となる。国民文学復刻影印本に掲

⁴ 主幹「編集後記」（『国民文学』第二巻・第八号）、1942.10、p.161

⁵ 崔載瑞「文学者と世界観の問題」（『国民文学』第二巻・第八号）、1942.10、pp.10-11

⁶ 崔載瑞「国民文学の要件」（『国民文学』第一巻・第一号）、1941.11、p.36

⁷ 白鉄「決意の時代」（『国民文学』第二巻・第九号）、1942.11、p.17

⁸ 座談会「朝鮮文壇の再出発を語る」（『国民文学』第一巻・第一号）、1941.11、p.79

⁹ 座談会「文芸動員を語る」（『国民文学』第二巻・第一号）、1942.1、pp.120-121

¹⁰ 人文社編「『国民文学』改題『国民文学』（第十巻）図書出版亦楽、2001、ソウル、p.577

載されている『『国民文学』改題』では、崔載瑞や金鍾漢などの行動を以下のように分析している。

朝鮮の独自の文学伝統を背負って決して同化されることなく、といって、日本のくびきを脱して独立を志向するのでもなく、あくまで日本支配をいったんは受け入れ、そのわく内で民族文化を保持するという危険な綱渡りを模索したのであった¹¹。

彼らのこの行動を裏付ける考え方が、「新地方主義」なのである。崔載瑞もまた、「新地方主義」に賛成する素地を早くから持っていたのである。崔は、「学生時代は親日派と見られて朝鮮人の学生から殴られたことがあるほど」の人物であったが、京城帝国大学の国文科教授である高木市之助の家に「ものすごい形相で」押しかけてきて、「先生たちはどんなに威張ったって僕達朝鮮人の魂を奪うことはできないよ!」というような「凄文句」を言い放ったという逸話がある¹²。李健志はこの場面を紹介した後に、崔載瑞について、体制を肯定し、その中でエリートになっていこうとする上昇志向のあった人物であり、あえて日本に寄り添っていった「面従腹背」の思想の持ち主ではないが、「大東亜共栄圏」や「内鮮一体」などの考え方をそのまま受け止めて信じていたために、あくまでも朝鮮は従属的であり日本と対等に扱われないことを批判している人物であると分析している¹³。つまり「親日」であるからといって、朝鮮への差別意識をなくそうとしない日本側の姿勢に対する抵抗精神を持っていなかったわけではないのである。そして植民地という限られた場でいかに折り合いをつけていくかを探っていった結果が、「新地方主義」という考え方に表れている。

以上のように日本と朝鮮での思惑の違いはあるものの、少なくとも『国民文学』編集の中心人物であるこの二人が上記の考えを持っていたので、雑誌としても¹⁴、朝鮮人作家に「日本民族の精神」を獲得させる、「自己錬成」¹⁵の推進へ進むことになる。よって、これからの朝鮮人作家は古典を読まなければならない¹⁶、という論や、もはや日本古典は教養であるといった論が執拗に繰り返される¹⁷。

まず上記の方針は、その「日本精神」が宿っているとされる、日本の古典¹⁸の古事記や万葉集¹⁹を紹介する論文掲載により具体化されていく。本格的に連載物として日本古典研究が雑誌上に登場するのは1942年11月号であり、この号から「国文学研究案内」が連載を開始する²⁰。ただ、これは一時筆者の病気の為²¹、1943年11月号から第二回以降が載るまで休載期間がある。さらに1943年2月号から、前月の1月号に掲載した、日本文学報国会選出の「愛国百人一首」の解説「愛国百人一首評釈」が始まり²²、1943年5月号からは「国学者列伝」として、本居宣長などの国学者を紹介する連載開始²³、とめまぐるしく展開されていく。

注意したいのは、ここでの「日本」には朝鮮は含まれず、あくまでも「内地」という日本を指すことである。だからといって、朝鮮古典や歴史の論文は連載されていないというわけではない。しかしこれは朝鮮の民族精神を学ばせるためのものではなく、ただ「内地」との交流があったという、「内鮮一体」

¹¹ 人文社、前掲書、2001、pp.576-577

¹² 高木市之助「国文学五十年」(岩波新書)、岩波書店、1967、p.140

¹³ 李健志『朝鮮近代文学とナショナリズム―「抵抗のナショナリズム」批判』作品社、2007、p.117

¹⁴ 主幹「編集後記」(『国民文学』第二巻・第九号)、1942.11、p.170

¹⁵ 崔載瑞「朝鮮文学の現段階」(『国民文学』第二巻・第七号)、1942.8、p.16

¹⁶ 同上、p.16

¹⁷ 齋藤清衛「教養と時局」(『国民文学』第二巻・第十号)、1942.12、p.42

¹⁸ 呉龍淳「国語文学と私―古典の魅惑―」(『国民文学』第四巻・第五号)、1944.5、p.39

¹⁹ 石田耕人「文芸時評」(『国民文学』第二巻・第十号)、1942.12、p.55

²⁰ 荻原浅男「国文学研究案内」(『国民文学』第二巻・第九号)、1942.11、pp.24-33

²¹ 荻原浅男「国文学研究案内(二)」(『国民文学』第三巻・第十一号)、1943.11、p.4

²² 近藤時司「愛国百人一首評釈 その一」(『国民文学』第三巻・第二号)、1943.2、pp.28-34

²³ 山崎良幸「国学者列伝」(『国民文学』第三巻・第五号)、1943.5、pp.101-105

を進める素地となる朝鮮の歴史²⁴や、朝鮮を卑下するような言説も見られる朝鮮古典紹介²⁵である。これは「内鮮一体」を歴史的に正当化し、ひいては歴史小説に役立てさせるという意図から掲載されたと考えられる。なぜ歴史小説への参考としてわざわざ上記のような論文を載せたかという点、歴史小説こそが、文学に朝鮮の独自性を出すべきか否かというローカルカラー問題を解決するものとして提示されたからである。これは、趙容萬の「船の中」をきっかけに誌面上で流行している。「内鮮交流」に関与する朝鮮の歴史的人物を登場させれば、朝鮮の日本への反抗心が表出することはないのである。よって、これからは日本古典とともに、朝鮮の、特に「内鮮交流」の歴史を知るべきという声が現れるようになる²⁶。

以上のように、地方色に関して作家が取るべき態度とは、まず「日本精神」を体得することである。そうすれば地方色が出ていたとしても何の問題もないということになる。そして「日本精神」に朝鮮は含まれないことから、この精神体得の具体的方法は日本古典の研究ということになるのである。

次は、国策迎合や時局便乗に関わる問題を取り上げる。作家は、「内鮮一体」などの国策宣伝や、戦争推進などの時局を取り入れた作品を書くべきか否かという問題である。ここでの対象作家には、朝鮮人も日本人も含まれている。余りにも露骨であると、ただのスローガンになり、面白みもなく、却って反感を買うかもしれない²⁷、一時的に時局便乗の風潮に合わせていけばよいという安易な考えの作家が現れる危険性がある²⁸。だからといって全く時代の雰囲気や国策が作品に表現されないのも、文学の性質である宣伝効果・啓蒙効果を活用する意味がない²⁹。二つの狭間で論者は揺れ動くが、ここでも意見は平行線に終わる。しかし解決策としてはまたしても、作家が戦時下、非常時下の国民という自覚をもってさえいけば、どんな題材であろうと「いゝ文学」³⁰、「よき文学」³¹、「国事的文学」³²になるという論に集約されていく³³。

この結論には、国家側と作家側、それぞれの異なる思惑により到達している。つまり、国家側としては、露骨な宣伝文学が出ては悪影響を及ぼすのみという考えがあったので、題材には幅を持たせようとする。一方作家側は、時局や政治に捉われずに書ける自由が与えられるので、国民文学を狭めて考えるなど、主張しているのである³⁴。実際に、中尾清は同様に自然を描く文学を認めている³⁵。

しかし文学の政治的効果を考慮に入れるならば、自然に題材は限定されていくことになる。面白い「恋愛もの」などの作品を書く段階に到達するには作家が国民意識を持たなければならないが、今は作家が「日本的世界観」を樹立する「過渡期」であるから、どのような題材でも認める、というわけにはいかないのである³⁶。そして、作家が国民的生活をしていけば何を書いてもいいという意見は中立的で漠然としているので、もっと政治に傾向的になるべきである、と批判する者も現れる³⁷。さらに1943年6月号には、文学が政治性に傾くことを時局便乗と見なして非難する者に対し、「便乗と見るか推進力と見るか」は人によって異なるものであり、「能動的推進と見る代りに受動的便乗と見るのは見るものの奴隷根性の表白」であるとして、正当化する論も掲載される³⁸。また、1942年10月号の「編集者の地位と責任」で

²⁴ 黒田省三「朝鮮通信使史話（一）」（『国民文学』第二巻・第九号）、1942. 11、pp.60-65

²⁵ 青木修三「朝鮮近世古典叢談―朝鮮の実学派とその著書」（『国民文学』第三巻・第十一号）、1943. 11、pp.36-45

²⁶ 主幹、前掲書、1942. 11、p.170

²⁷ 星出壽雄「演劇統制の諸問題」（『国民文学』第二巻・第一号）、1942. 1、p.52

²⁸ 崔載瑞「私の頁」（『国民文学』第二巻・第三号）、1942. 3、p.11

²⁹ 星出、前掲書、1942. 1、p.52

³⁰ 宮崎清太郎「大東亜戦争一周年を迎える私の決意」（『国民文学』第二巻・第十号）、1942. 12、p.15

³¹ 李、前掲書、1942. 4、p.71

³² 崔、前掲書、1942. 3、p.12

³³ 座談会、前掲書、1941. 11、p.73

³⁴ 鄭飛石「新しい国民文芸の道―作家の立場から―」（『国民文学』第二巻・第四号）、1942. 4、p.60

³⁵ 中尾清「詩壇への沙汰書」（『国民文学』第四巻・第十号）、1944. 10、p.17

³⁶ 座談会「明日への朝鮮映画」（『国民文学』第二巻・第十号）、1942. 12、p.72

³⁷ 安含光「朝鮮文学の特質と方向について」（『国民文学』第三巻・第一号）、1943. 1、p.46

³⁸ 平沼文甫「推進か便乗か」（『国民文学』第三巻・第六号）、1943. 6、p.100

は、「社会の腐敗面を露き立てたやうなもの」、「個人の不幸を殊更に拡大したやうなもの」、「男女関係をたゞ面白く描いたやうなもの」、「変つた人物の行状記」など、「今更何で又こんな作品を書いてゐるのかと、その人間の時代意識を疑ひ度くなるやうな作品がある」と嘆き、排除すべき題材が具体的になっていく³⁹。

つまり作家に国民意識があれば、題材はどんなものでも構わないという考え方は、「過渡期」には通用しないのである。文字通りどんな題材を扱ってもいいという意味ではなく、最低限避けるべき題材は明らかに示されるようになる。

よって、宣伝啓蒙、時局を扱う作品が要求されることになるのだが、作家たちの間で如何にして書けばよいのかという当惑が広がっていく。当時の作家は、他に職を持っている場合が多い⁴⁰が、主に教師など職種が限られている。よって、例えば日本語教師の生活なら作品に書けるかもしれないが、兵士や工場で働く労働者、つまり啓蒙すべき対象者の実際の生活経験がないということが問題となったのである。現場を知らなければ、現場にいる読者に伝わらない。結局、表面的で実状のわかっていない作品しか書けないということになってしまうのである⁴¹。作家たちはここに悩みを抱えることになる。

そこで解決策として、作家の派遣、作家動員という活動が模索される。作家に民衆へ向けて演説をさせたり、工場や農村、漁村などの生産現場、もしくは戦場に派遣して、視察、あるいは実際に働かせたりする計画である⁴²。国家側からしても民衆の啓蒙効果、労働力不足の解消に繋がるし、作家側からしても現場を取材し、より実情に即した作品を書くことができるという一石二鳥の策である。これは『国民文学』が刊行される以前の1940年前後には既に念頭にあった企画であり、1940年7月号の『文芸』では、崔載瑞がこの「マンネリズム」の解消のためには、「出版社で作家を出張させ、農山漁村を調べさせたりすべきだ」という意見を述べたと紹介されている⁴³。

この活動は、当初の段階では作家はあくまでも作家という地位にいるべきであり、作家は労働者として作品を作り⁴⁴、作品を作ることが戦争である⁴⁵という前提での動員であった。現場に行くことで得た体験から作品を生み出すことができれば、時局便乗問題も解決できるはずだったのである⁴⁶。よって、従軍した作家に「ひけめ」⁴⁷を感じていたとしても、完全に転職までする必要はなく、あくまでも「銃後の奉公」⁴⁸で活躍すればよかったのである。しかし、時局便乗にならないための策であったこの現場への作家動員は、次第に作家という本来の職を捨てて、現場で働けという声に切り替わる。

実際に、作家の転職はいい作品が書けないから問題になったわけではなく、早くから経済的な面で生活が続けられなかった者⁴⁹や、発表機関の減少⁵⁰のため、やむを得ず文筆業をやめたという者が多く、筆者難⁵¹や、そのことによる文壇の寂れが嘆かれていた面が多かった⁵²。しかし戦争参加の声が高まると、二つの転職要請が作家に向けられるようになる。兵士になるか、生産現場で働く労働者になるかの二つである。

まずは、兵隊への転職要請について見ていく。1942年5月に朝鮮に徴兵制実施の決定が発表された時

³⁹ 「編集者の地位と責任」(『国民文学』第二巻・第八号)、1942. 10、p.3

⁴⁰ 座談会「新半島文学への要望」(『国民文学』第三巻・第三号)、1943. 3、p.2

⁴¹ 座談会「軍人と作家・徴兵の感激を語る」(『国民文学』第二巻・第六号)、1942. 7、p.48

⁴² 白鉄「古さと新しさ―戦時下の文芸時評―」(『国民文学』第二巻・第一号)、1942. 1、p.81

⁴³ 李石薫「朝鮮文学通信」改造社『文芸』、1940. 7、p.191

⁴⁴ 田平「大東亜文学建設の為に一大東亜文学建設綱領の樹立」(『国民文学』第三巻・第十号)、1943. 10、p.144

⁴⁵ 石田耕人「決戦化文壇の一年―特に創作にみる―」(『国民文学』第三巻・第十二号)、1943. 12、p.13

⁴⁶ 座談会、前掲書、1941. 11、p.85

⁴⁷ 金鍾漢「編集後記」(『国民文学』第三巻・第六号)、1943. 6、p.148

⁴⁸ 座談会、前掲書、1943. 3、p.8

⁴⁹ 「文学鼎談」(『国民文学』第三巻・第九号)、1943. 9、p.29

⁵⁰ 則武三雄「現代詩試論」(『国民文学』第三巻・第十一号)、1943. 11、p.14

⁵¹ 金、前掲書、1943. 6、p.148

⁵² 崔載瑞「勤労と文学」(『国民文学』第三巻・第五号)、1943. 5、p.80

から、状況は一変する。作家たちは「祖国観念」を持つようになり、報道演習に参加するようになる。雑誌も、まずは軍の報道演習を題とした小説⁵³や、実際に報道演習に参加した作家の記録⁵⁴を載せることから始まる。しかしこれは実際の現場に行くわけではなく、あくまでもお試しの戦場体験である。そして、1943年9月号には、報道演習の本格化を計画していることを語る軍の報道部長の文章が載る⁵⁵。

1943年10月20日に陸軍特別志願兵臨時採用施行規則が公布され、朝鮮人の学徒出陣が開始された後には、実際に学徒出陣をする作家の声を雑誌に掲載している⁵⁶。そして1944年5月号には、「安東益雄、朴赫、金璟熹三君の学徒出陣があり、今度又兄玉金吾、則武三雄両氏の応召を見た」と、『国民文学』にも作品を出していた作家たちが徴兵されたことを伝え、「文人は最後まで文筆を執るのが職域奉公だとする考へ方は、既に今日の事態には合はない古い観念である」と、兵士への転職を支援するかのような巻頭言を載せている⁵⁷。

そして戦争がさらに激しさを増し、敗戦に近付いていく1944年5月号の座談会では、戦争に行った経験がなく実情がわからないから、作家の方から「戦争の第一線に行かして貰いたい」という意見が出た⁵⁸、という発言まで出てくるようになる。

次に、生産面への転職要請を見ていく。当時の作家動員は、主に朝鮮文人協会が企画するものであり、かねてから作家からの要望もあった企画である⁵⁹。

1942年11月号に掲載された「朝鮮文人協会実践要綱」では、「一、鮮内現地視察／二、北南支の戦地探訪／三、満州開拓村視察」という動員計画が挙げられている⁶⁰。ここからわかるように、まずは視察がメインだったのである。

ところが、「生産文学」という指導理念を打ち立て、作家も生産拡充運動に参加することを目標とされるにつれ、様相は変化していく。まずは、初期の頃のような一時的な現場派遣では効果がないから、もっと長期間の派遣が必要だという考えが巻頭言に載る⁶¹。また、年中文筆活動をするのではなく、「鋤を持つて、剣を持つて」働きながら創作をすべきであるという兼業推進の論が出始める⁶²。

そして極端にも転職を勧めるものまで現れる。小説「新しき世代」では、文学に従事するのは「十人か二十人でいゝ」のだから、作家も「ペンを棄てゝ、この手にハンマーを」持って働くべきだと述べる人物が現れる⁶³。また、「文学に無力を認めた場合には、あつさり離縁してハンマを振るか鋤を把るかし、別世界に入籍するのが最も良薬だ」⁶⁴という意見を主張する者も、雑誌上に登場するようになる。終刊となる1945年5月号では、『国民文学』にも作品を出していた作家で、生産現場に転職した者を名前を挙げて紹介する記事が載っており、まるで転職のお手本を示しているかのようである⁶⁵。

以上のように、作家は様々な要請を強いられている。朝鮮独自の事柄、時局に関係のない日常など、今までは無条件に許されていた題材を描くことが困難となったと捉える論者たちは、今後は何を書けば認められるのか議論を交わす。そして結局、何を扱ってもよいという方向性となるが、だからといって安心はできない。検閲の危険性のある題材を作品に反映させるには、戦時下の皇国臣民であることが条件となるからである。その条件はいつもつきまとい、作家たちを苦しめる。日本精神を体得しようと古

⁵³ 崔載瑞「報道演習班」(『国民文学』第三巻・第七号)、1943. 7、pp.24-48

⁵⁴ 「朝鮮軍報道班員の手帖」(『国民文学』第三巻・第七号)、1943. 7、pp.50-61

⁵⁵ 長屋尚作「時事有感—徴兵制・戦局・文学者など—」(『国民文学』第三巻・第九号)、1943. 9、p.4

⁵⁶ 朴赫「私の祈願—学兵と出で立つ日—」(『国民文学』第四巻・第一号)、1944. 1、pp.60-65

⁵⁷ 巻頭言(『国民文学』第四巻・第五号)、1944. 5、p.3

⁵⁸ 座談会「決戦美術の動向」(『国民文学』第四巻・第五号)、1944. 5、p.59

⁵⁹ 座談会、前掲書、1941. 11、p.85

⁶⁰ 寺島驍「朝鮮文人協会の改組に就きて」(『国民文学』第二巻・第九号)、1942. 11、p.43

⁶¹ 巻頭言(『国民文学』第四巻・第七号)、1944. 7、p.2

⁶² 田中捨彦「国語文学の前進」(『国民文学』第四巻・第五号)、1944. 5、p.26

⁶³ 楠田敏郎「新しき世代」(『国民文学』第四巻・第十号)、1944. 10、pp.61-62

⁶⁴ 大島修「国語文学と私—国語文学覚書—」(『国民文学』第四巻・第五号)、1944. 5、p.42

⁶⁵ 平沼文甫「地方文化の陣容—咸南だより—」(『国民文学』第五巻・第五号)、1945. 5、p.20

典を学んだり、作品の材料探しとともに戦時下国民としての自覚を得ようと現場に出てみたりと、様々な努力をしてはみるものの、作家としてこれからも活動し続けるための条件が増えていく一方である。最終的には作家でいることに対して窮屈さを感じるようになり、居場所を自ら捨てていく。そして仲間内でさえも、転職への圧力を掛け合うようになっていくのである。

3. 日本語に対する温度差

この章では、文学において重要な問題点となる言語について、雑誌の読者や作家、編集者の意識を考察する。

はじめに、雑誌『国民文学』が読者をどのように認識して、どうアプローチしていこうとしたのかを探る。まずは、雑誌編集側はどんな読者を対象として設定していたのかということについて論じていく。

まず総督府保安課長古川兼秀が、座談会「半島学生の諸問題を語る」の場で、雑誌の「諺文版の読者層はどんなになってゐますかね」と尋ねた際、崔載瑞は「大体に知識階級ですね」と答えている。そして古川は、知識階級が読者ということは、「国語を大体分つてゐる人だけを相手にしてゐる」と解釈している⁶⁶。よって雑誌は知識階級をターゲットにしているということになる。これは、多くの論者が実際の掲載文にて、知識階級へ語りかける文章を書いていることからわかる。例えば、1942年1月号巻頭言、1942年4月号巻頭言、1943年2月号巻頭言では、知識階級のなすべきことを説いている。

そして、その知識階級には学生も含まれている。1942年4月号「若き世代に与ふる書」では、「私の新愛なる読者も恐らく二十歳前後の青年諸君であらうと思ふ」⁶⁷と述べて、学校に合格した学生らに祝辞を述べている。

しかし当初は、知識階級のみが対象であったわけではない。朝鮮語版を年8回と、日本語版よりも多めに朝鮮語雑誌の発行を計画していたことから、日本語の普及が遅れている民衆が読むことも想定していたのではないかと考えられる。想定読者の日本語の識字率の低さは、日本語雑誌転換に対する大きな障害となる問題であった。全ての朝鮮在住の朝鮮人も対象読者であったとすると、1942年の段階で「国語を解する者」が15%しかいない⁶⁸という現状では、日本語で書かれた出版物が広まらない事は火を見るより明らかである。1938年の朝鮮教育令改正によって朝鮮語が随意科目となり、公立学校では朝鮮語の授業がほぼなくなり確実に朝鮮語使用の場が狭まってはいたが、それで急速に日本語話者が増えるというわけではない。義務教育は1946年度開始の予定となっており、1940年代に入っても教育を受けられない子どもは多数存在した。実際1943年4月号の座談会「義務教育になるまで」では、朝鮮総督府教学官高橋濱吉が現在の就学率は大体54%と説明し、この数字が高率だと主張する高橋に対し、評論家の咸尚勲は懸念を表している場面がある⁶⁹。また学校現場では、生徒は高学年になるほど朝鮮語を使う傾向が見られたという⁷⁰。1943年になっても同様で、43年1月号『国民文学』の「国語にそだてる」という日記風のエッセイでは、教師が父兄に、名前だけは日本語で言えたり書けたりできるよう生徒を指導してほしいと言ったところで家庭での日本語教育は浸透せず、ほぼ効果がない様子が描写されている⁷¹。同じく1月号の「国語問題会談」で京城帝大予科教授の近藤時司は、「国語」普及運動の成果が出ていると主張したいのか、「国語理解者は三割位」、幼児や老人を除けば「恐らく四割位」になるだろうと楽観的な姿勢でいる⁷²。しかし、1943年末になっても日本語を解する朝鮮人は全体の22.2%しかいなかったの

⁶⁶ 座談会「半島学生の諸問題を語る」(『国民文学』第二巻・第五号)、1942.5・6、p.147

⁶⁷ 松月秀雄「若き世代に与ふる書」(『国民文学』第二巻・第四号)、1942.4、p.6

⁶⁸ 金田龍圭「徴兵制実施と吾が学徒の覚悟」(『国民文学』第二巻・第七号)、1942.8、p.40

⁶⁹ 座談会「義務教育になるまで」(『国民文学』第三巻・第四号)、1943.4、p.14

⁷⁰ 趙景達「植民地朝鮮と日本」(岩波新書)、岩波書店、2013、p.190

⁷¹ 飯田彰「国語にそだてる」(『国民文学』第三巻・第一号)、1943.1、p.31

⁷² 「国語問題会談」(『国民文学』第三巻・第一号)、1943.1、p.50

である⁷³。

この状況に対応するため、「国語雑誌への転換」の知らせでは、「一般大衆に取って諺文文学が必要欠く可からざるものであることは論を俟たぬ所でありますので、弊社は年数回程度の諺文創作集を発行」⁷⁴すると述べているのである。さらに、主幹崔載瑞が「大和文庫」なるものを企画していたことが、座談会発言からわかる。この文庫は、「徴兵制実施に対する準備」として、朝鮮語で「昔の日本の偉人」に関することや、「神社或は神道に関する平易な解説や、古典の解説」を載せる本のことでありと崔は述べている⁷⁵。

このように民衆向けは、雑誌を補う形で単行本として出版し、雑誌の方は、全面日本語雑誌になったので、日本語のわかる知識人向けへと対象を分ける方向となっていた。しかし、日本語を使うことがもはや強制されていた時期に、民衆向けの朝鮮語の出版が活発になったとは考えにくい。雑誌出版を日本語のみで行なうという選択は朝鮮語排除により加担していくことであり、一般民衆向けの他の出版は非常に難しくなるという結果となることは明白である。よって自然な流れとして、日本語がわかる一部の知識階級に向けての雑誌出版のみがより重視されていったと思われる。

次は、読者との実際の交流、アプローチについて見ていく。これには大きく分けて三つのタイプがある。

一つ目は、読者の中から未来の作家を発掘するための、懸賞・推薦タイプである。1941年12月号は、創刊して一ヶ月も経たないにも関わらず、「原稿が集まらなかった」⁷⁶ために休刊している。様々な原因が考えられるが、雑誌に賛同する執筆者が少なかったために起こったことである。また、日本語雑誌に転換してからは特に「悲鳴をあげざるを得ないほどの筆者難」⁷⁷であり、新人作品が載るだけで喜びを露わにする編集後記⁷⁸が多く、新人を発掘することは喫緊の課題であったのである⁷⁹。よって、時代を追うごとに作家を募る試みが本格化していく。

まずは『国民文学』自体ではなく、朝鮮文人協会（後、朝鮮文人報国会）が懸賞募集を掛ける。創刊号には「朝鮮文人協会懸賞小説募集規定」が載っている。この当選発表が2月であり、入選作品が誌面に掲載されている⁸⁰。この頃はまだ、「既成、新人を問わず一般から募集」している⁸¹。

次には、朝鮮文人報国会で小説と戯曲を懸賞募集している広告が1943年11月号⁸²と1943年12月号⁸³の二回掲載される。こちらも新人に限らず募集している。

雑誌独自のものとしては、朝鮮文人報国会の結成を機に一層新人の出現を促進するため設けたと述べられている「新人推薦制」の募集規定の掲載がある⁸⁴。この広告は、1944年1月号、1944年3月号、1945年2月号を除いては、1943年6月号から毎号掲載されており、力を入れていることがわかる。そして、実際に新人推薦での作家の作品が、1943年9月号の呉本篤彦による小説「矜持」⁸⁵を皮切りに誌上に掲載されていく。

また、懸賞タイプにはもう一つあり、懸賞論文ということで特集を組んでいるものがある。それが、

⁷³ 趙、前掲書、2013、p.189

⁷⁴ 国民文学「国語雑誌への転換」（『国民文学』第二巻・第五号）、1942.5・6、p.45

⁷⁵ 対談「文化と宣伝」（『国民文学』第三巻・第一号）、1943.1、pp.82-83

⁷⁶ 「編集後記」（『国民文学』第二巻・第一号）、1942.1、p.266

⁷⁷ 金鍾漢「編集後記」（『国民文学』第三巻・第六号）、1943.6、p.148

⁷⁸ 「後記」（『国民文学』第三巻・第九号）、1943.9、p.128

⁷⁹ 座談会、前掲書、1942.5・6、p.147

⁸⁰ 「朝鮮文人協会懸賞小説募集規定」（『国民文学』第一巻・第一号）、1941.11、p.153

⁸¹ 同上、p.153

⁸² 「文人報国会で小説と戯曲を懸賞募集」（『国民文学』第三巻・第十一号）、1943.11、p.19

⁸³ 「文報の頁」（『国民文学』第三巻・第十二号）、1943.12、p.9

⁸⁴ 国民文学編集部「新人推薦制」（『国民文学』第三巻・第六号）、1943.6、目次一面

⁸⁵ 呉本篤彦「矜持」（『国民文学』第三巻・第九号）、1943.9、p.80

「徴兵制実施記念論文」である。1942年5・6月合併号で応募者を募集し⁸⁶、1942年8月号で当選発表をしている⁸⁷。そして実際に当選した論文を1942年8月号⁸⁸、1942年10月号⁸⁹、1942年11月号⁹⁰の3回にわたって掲載している。これは大々的に受賞会を行ない、その模様を記事にしている⁹¹。

次は、読者の気軽な投稿タイプである。しかし、掲載すると述べているにも関わらず、ついに一度も雑誌上で読者の声が紹介されることはなく企画倒れとなったようである。まず、1942年7月号⁹²と1942年8月号⁹³に掲載されている「『読者の頁』原稿募集」では、「一、読者批評／二、誌上常会／三、地方文化の弁」という題にて、原稿を募集している。また、1943年8月号⁹⁴と1943年9月号⁹⁵に掲載された「徴兵問答」では、翌年1944年から実施予定の徴兵制に関する「読者からの質疑を募集し、それに対して直接朝鮮軍当局から」回答をもらうので、利用してほしいと書かれている。

また、編集側は、「愛読者の調査カード」を作ることを1944年6月号の「編集後記」で宣言している⁹⁶。このカードは、出版業界が戦争により切迫した状況にある中でも存続していただけるのは読者のおかげでもある、ということで作ろうとしているものであり、実際に何を調査するのかは書かれていない⁹⁷。この「愛読者カード」は、後に雑誌が配給制になった際、定期購読者に「優先配給其他特別なる配慮」をするために使われるようになる⁹⁸。

最後のタイプは、実際に読者と対面する企画である。『国民文学』創刊一周年を記念した「国民文学講座」の知らせが、1942年10月号の巻末に載っている。「国民文学とはどんなものであるか、それは日本文学の伝統とどんな繋りを持つてゐるか又今後どう云ふ途を辿つてゆくべきか」という問題に対して、佐藤清、崔載瑞らが講演するという講座である⁹⁹。この広告ページには、開講日十月二日と十月三日の聴講券まで切り取り式に雑誌に付けており、気軽に参加できるように読者を誘っている¹⁰⁰。しかし少なくとも雑誌上では、この「国民文学講座」の第二回目以降が開かれる知らせはなく、企画は続かなかったようである。

以上のように、新人作家を募ったり論文を掲載したりする点においては成功し、読者が雑誌に自分の作品を出すきっかけ作りはできている。しかしそのように意欲的で、日本語のよくわかる者以外の読者と交流している様子は、少なくとも雑誌からは見られない。気軽に読者との交流を図ることが難しかった時代が原因であることも考えられるが、企画がごとごとく頓挫するなどずさんな部分が否めない。さらに、日本語を民衆に浸透させる政策もまだ「過渡期」であるという意識があったにも関わらず、日本語強制の波に飲まれ急進的に出版の日本語化を推し進めたために、一般民衆の読者まで網羅できなかったと思われる。

次はこのような読者の状況と、作家、編集者の状況とを比較し、いかに日本語や日本語文学に対する意識が異なっていたかを具体的に考察していく。

第1章の「はじめに」で述べたとおり、『国民文学』の当初の計画では、年4回は日本語版（国語版）、

⁸⁶ 「株式会社人文社・創立記念事業・その一 徴兵制実施記念論文懸賞募集」（『国民文学』第二巻・第五号）、1942.5・6、pp.206-207

⁸⁷ 「『国民文学』編集部「徴兵制実施記念論文懸賞募集当選発表」（『国民文学』第二巻・第七号）、1942.8、pp.34-35

⁸⁸ 当選論文（『国民文学』第二巻・第七号）、1942.8、pp.36-50

⁸⁹ 当選論文（『国民文学』第二巻・第八号）、1942.10、pp.44-48

⁹⁰ 当選論文（『国民文学』第二巻・第九号）、1942.11、pp.66-81

⁹¹ 「徴兵制記念論文当選者 商品授与式挙行」（『国民文学』第二巻・第八号）、1942.10、p.29

⁹² 「『読者の頁』原稿募集」（『国民文学』第二巻・第六号）、1942.7、p.203

⁹³ 「『読者の頁』原稿募集」（『国民文学』第二巻・第七号）、1942.8、p.112

⁹⁴ 「『徴兵問答』について」（『国民文学』第三巻・第八号）、1943.8、p.62

⁹⁵ 「『徴兵問答』について」（『国民文学』第三巻・第九号）、1943.9、p.4

⁹⁶ 「編集後記」（『国民文学』第四巻・第六号）、1944.6、p.126

⁹⁷ 同上、p.126

⁹⁸ 人文社「本誌年定読者へお知らせ」（『国民文学』第五巻・第二号）、1945.2、p.14

⁹⁹ 「『国民文学』創立一周年記念 国民文学講座（第一回）開講」（『国民文学』第二巻・第八号）、1942.10、広告頁

¹⁰⁰ 同上、広告頁

年8回は朝鮮語版で発刊することになっていたが、創刊後間もなくの1942年5・6月合併号から全面的に日本語版へと切り替わることになる。その背景には、朝鮮への徴兵制実施の決定と、「国語」普及運動¹⁰¹とがある。

徴兵制実施と雑誌の全面日本語版転換との関係は、以下の事情が関わっている。1942年7月号の『国民文学』に掲載された「徴兵問答」では、徴兵制についてのQ&Aがあるが、この中の「徴兵制と国語全解との関係」という問いに対する朝鮮軍当局の回答は次のとおりである。

全然別個ノ問題ニシテ国語ノ解否ハ何等徴集ニ関係セス、従ツテ一般ニ国語不解者ハ入営後自分ガ困ル事トナル、速力ニ当局施設スル講習所等ニ於テ国語ヲ修得スルヲ要ス¹⁰²

ここでは、徴兵制実施と日本語使用能力は「別個ノ問題」としているが、この「別個」とは日本人と朝鮮人を区別しないということのアピールであり、日本語がわからないからといって徴兵に取らないということではない。だからといって日本語のわからないままでは「自分ガ困ル事トナル」と、まるで自己責任になるかのように説明し、いち早く日本語を修得する必要性を強調しているので、実質的には日本語使用が強制となっている。このように1942年5月の徴兵制実施の決定は、軍の中で日本語を解さない者が兵士として入ってきては指導が滞るという懸念を生み出し、普段の生活から日本語を意識するように指導する方向性が強まったため、文壇もその方針に倣ったと思われる。

また「国語」普及運動は、同じく1942年5月から本格化された運動である。これは国民総力朝鮮連盟の下で行なわれ、1944年8月には「国語」常用全解運動となっている。文壇以外でこの運動の影響と思われる大きな出来事としては、1942年10月に起こった朝鮮語学会事件がある。これは、『ハングル大辞典』の編纂に携わっていた朝鮮語学会会員が治安維持法違反で逮捕された事件である。朝鮮語の辞典編纂だけで検挙されるという事態は、当時の日本語強制力が強くなっていたことを示す実例である。

この流れは雑誌『国民文学』にも必然的に影響する。総督府側は、指導的地位にある者がまず手本となって日本語を使うべきだという考えを持っている¹⁰³ので、『国民文学』のように知識階級が読む雑誌の言語は日本語にすべきであると迫っていき、雑誌側は押し切られた形での方針変換となった。だが、この強引な決定が功を奏することはない。

まずは、この決定に伴う雑誌編集側の混乱を見ていく。座談会では崔載瑞が、朝鮮語が一般社会で使われている以上、朝鮮語による文学も必然的に出現するので、文人は日本語だけで書くか否かの「非常なデイレンマ」¹⁰⁴に陥っていると語る。そしてさらに、総督府保安課長古川の発言に対し、日本語で書ける作家が足りないという懸念を示す。具体的には以下のように議論が展開されていく。

古川 国語版にした方がいゝ、一時的に読者が減つても……

崔 結局さういふ風に展開して来るわけですが、それには、相当技術的な問題もあります。と云ふのは国語で執筆出来る小説家がやはり二、三十人ゐないとやり難いですね。何時も同じ顔触れにするわけには行きませんから。今までの所で国語で書ける小説家といふものは殆ど出し尽してあと半島人作家を動員することは国語版では難しくなつたので、東京あたりから一人二人入れるのですが、朝鮮文壇の転換革新を目標にしてゐるのですから出来れば半島人作家の作品を載せたいといふのが希望なんです。今の所満足に国語で、小説を書ける作家は四五人程度で、どうしても新しい作家、新しい詩人が出て来なくては、駄目だといふことになります。それには相当な時日が要ります。兎

¹⁰¹ 国民文学「国語雑誌への転換」(『国民文学』第二巻・第五号)、1942.5・6、p.44

¹⁰² 朝鮮軍当局回答「徴兵問答」(『国民文学』第二巻・第六号)、1942.7、p.111

¹⁰³ 座談会「半島学生の諸問題を語る」(『国民文学』第二巻・第五号)、1942.5・6、p.147

¹⁰⁴ 同上、p.147

も角、論文は多少小説と違って生硬な言葉でも出来ると思ひましたので、論文だけは、全部国語で依頼した訳です。創刊当時とは事情がまるきり一変して、今一番大きな問題は国語版諺文版の問題となつてゐるわけです。それで諺文版を一応撤廃しまして、小説の欄にだけ諺文版を残してはと、いづれ私の方から正式に意見を述べなくてはならぬのですが、大体そこまで考へてゐるのです。

古川 これはあなただけの問題ぢやない。諺文でなければ書けない人もゐるのだから。

崔 たゞ用語だけの問題で優秀な作家が葬られるといふことは、私達の立場から言へば忍びないのです。内容もよくなつてゐるにも拘らず国語で書けないばかりに葬り去られるといふのは¹⁰⁵。

この会話の後に、総督府学務課長本多武夫が日本語普及の重要性を訴え、雑誌側に圧力をかけていく。ここで崔が提案した一部朝鮮語を雑誌上に残す折衷案は、雑誌以外で「年数回程度の諺文創作集」¹⁰⁶を一般大衆のために出版するという現実的な計画に変わっていく。これは上述したとおり、作家だけでなく、日本語を解さない読者への文学による啓蒙の観点を考慮して絞り出した苦肉の策である。しかし崔は、1943年1月になつても「国語普及といふことと、諺文による宣伝啓蒙」を「ごつちやにする傾向がある」として、対談相手の津田剛に、民衆への啓蒙方法について提案を求めている¹⁰⁷。

そして作家の人手不足の問題に対しては、まだ朝鮮語で書ける余地があると、以下のように説明している。

勿論国語普及運動は朝鮮語使用の禁止を意味するものではなく、従つて諺文文学に対してもさう云ふ意味からの圧迫は全然無い訳で、今後と雖も諺文で優秀な作品が生産される可能性は充分あり、従つて又翻訳を通じて内地人読者がそれらの作品に接する機会もあるであらう¹⁰⁸。

この言葉は、朝鮮人作家の日本語創作への不安を払拭させようとしているのである。

しかし、次第に日本語で書くことが圧迫となっていく。この現象は雑誌『国民文学』内でのみ起こっていたことではなく、文壇に出ることの必須条件になっていくのである。南富鎮は、この当時の文壇状況を「日本語一辺倒に突っ走る」¹⁰⁹時代としている。

『国民文学』内でその状況を表す例としては、まず、上述で挙げた読者向け懸賞小説は、全て日本語での応募に限られるようになることが挙げられる。1941年の創刊号に掲載されている「朝鮮文人協会懸賞小説募集規定」では、既に用語の項目には「国語」とあり¹¹⁰、1943年11月号初出の朝鮮文人報国会による懸賞も、「用語は国語に限る」と規定されている¹¹¹。また、1943年6月号初出の『国民文学』による「新人推薦制」広告では、日本語規定に触れることすらない¹¹²。誌面であるから、日本語で応募することは暗黙の了解になっていたのである。

さらに顕著な例としては、以下のように、詩壇に関する論考において朝鮮語での創作自体が時代遅れと受け取る記述が見られるようになる。

私は今、国民文学の志向する所に従ひ、諺文による詩人の業績には何ら触れない。私自身触れる資料を持合せず、又触れるべき時も早や過ぎ去つたと思ふ故に、私のこの一文は過渡的事情にある或

¹⁰⁵ 座談会、前掲書、1942. 5・6、pp.147-148

¹⁰⁶ 国民文学、前掲書、1942. 5・6、p.45

¹⁰⁷ 対談「文化と宣伝」、前掲書、1943. 1、p.81

¹⁰⁸ 「内鮮文学の交流」（『国民文学』第二巻・第七号）、1942. 8、p.1

¹⁰⁹ 南富鎮『文学の植民地主義—近代朝鮮の風景と記憶—』世界思想社、2006、p.92

¹¹⁰ 「朝鮮文人協会懸賞小説募集規定」、前掲書、1941. 11、p.153

¹¹¹ 「文人報国会で小説と戯曲を懸賞募集」、前掲書、1943. 11、p.19

¹¹² 国民文学編集部、前掲書、1943. 6、目次一面

る一面の強調を見るやも知れぬが止むを得ない¹¹³。

つまり、全面日本語創作に切り替わっている最中という「過渡的事情」のある文壇では、朝鮮語による作品があってもやむを得ないことだ、と朝鮮語作品を元来からあるべきではないと見る風潮が出るようになったのである。

雑誌編集側の懸念など吹き飛ばすように登場した、「日本語の大衆文化のなかで育ち、日本語教育を受け、日本語による表現自体がすでに当たり前のことになっていた」¹¹⁴新人作家たちからも同様の主張が見られる。彼らは、雑誌編集側の意見と読者との温度差を感じ、「過渡期」の現状に不満を感じている。

まず編集者は、日本語へ切り替えたとはいえまだ朝鮮語の文学に未練を持っている状況である。それは、以下の1944年5月号巻頭言から読み取れる。

一方に於て諺文文学の衰退と云ふ陰気な面がないでもないが、然しそんなことには無頓着に、烈しい情熱を以て国語表現に飛び込む若い人達の進出ぶりには全く目覚ましいものがある。たゞかうした時代の制約上、それら無数の無名人に適当な発表の機会が与へられないのは洵に残念であるが、然し今や滔々と流れてゐる国語文学への情熱はそんなこと位で阻止されるものではない¹¹⁵。

上記巻頭言では、朝鮮語でしか書けない「無数の無名人」が文壇に出られないことによる「諺文文学の衰退」が嘆かれている。ここには、日本語雑誌への転換を決定した際の崔載瑞の考えが反映されている。さらに1944年9月号の巻頭言において、内容においてはともかく、朝鮮語の出版物自体は日本語のわからない大衆にとって宣伝啓蒙となるので、問題ではないと擁護している¹¹⁶。

次に読者の状況を見ていくが、編集側の未練よりさらに状況が膠着している。

読書傾向を調査した一つ目の記事が、1943年2月号の「文化陣営」に掲載されている。これによると、京城の各書店では『国民文学』が目指す「純文学ものは割に振はず」、鍾路の書店では「六割を占める文芸書の中七割が諺文文芸書」であり、「興味本位の諺文大衆小説が依然としてよく売れている」のである¹¹⁷。

さらに二つ目の記事としては、1943年6月号掲載の「農民文学門外観」がある。ここでは農村経済研究家¹¹⁸の印貞植が、朝鮮の農民が農閑期に読む本の傾向を、実際の農家から調べて割り出している¹¹⁹。調査によると、「春香伝を筆頭として、沈清伝や花紅蓮伝、玉楼夢などの所説『古代小説』が大部分を占めて」おり、次に多いのが「某々伝といふやうな英雄伝、偉人伝」であり、稀に「その他伝説的な野談漫談本」があるという¹²⁰。そして、どの農家であっても「所謂現代小説がここでは甚だしい冷遇を受けてゐる」¹²¹と続けている。これを受けて印は「現代小説が一般に平易な諺文で書かれてゐるに拘らず一向に今日の農民達から敬遠されてゐる状態を持續して居る」¹²²理由を探っていくが、この調査結果から注目したいのは、冷遇されているという現状である。地方の人々は、日本語作品どころか、朝鮮語で書かれている現代小説の類でさえ見向きもしていないのである。「朝鮮の農民に何を読ませべきか」¹²³というはが

¹¹³ 寺本喜一「詩壇の一年 半島詩壇の創成」(『国民文学』第二巻・第九号)、1942. 11、pp.21-22

¹¹⁴ 南、前掲書、2006、p.92

¹¹⁵ 巻頭言(『国民文学』第四巻・第五号)、1944. 5、pp.1-2

¹¹⁶ 巻頭言(『国民文学』第四巻・第九号)、1944. 9、p.3

¹¹⁷ 「文化陣営」(『国民文学』第三巻・第二号)、1943. 2、pp.101-102

¹¹⁸ 印貞植「農民文学門外観」(『国民文学』第三巻・第六号)、1943. 6、p.84

¹¹⁹ 同上、p.82

¹²⁰ 同上、p.83

¹²¹ 同上、p.83

¹²² 同上、p.83

¹²³ 「朝鮮の農民に何を読ませべきか」(『国民文学』第三巻・第五号)、1943. 5、pp.98-99

き問答まで企画している雑誌側の思惑と、現実とは全くかみ合っていない。

当然これらの状況と、息巻く新人たちの日本語文学への意欲との温度差は計り知れない。彼らは、1944年5月号に「国語文学と私」という題で文章を寄せている。まず城山豹は、「国語文学と云ふひとつの名称が、不思議な響なしに通つてゐるのは、朝鮮文壇が言語的に（したがつて思想的に）一つの過渡期のせめをもつてである」¹²⁴と冒頭で述べる。さらに次の大島修は、「現状を眺め渡してみても、朝鮮に於ける国語文学の貧弱さにあきたらないものを覚える」と述べ、それは「過渡期の現象として当然の苦悶だと云ふ」と続ける¹²⁵。

また、最後の南川博は、「私に取つては文学即国語文学で、改つて国語文学などと断る必要はないのである」¹²⁶と違和感を表明し、「諺文で書かれた文学、即ち朝鮮文学に対して別段執着を感じたことがなかった」¹²⁷と述べる。

これらの言説からわかるように、朝鮮語文学に執着することや、「国語文学」という言葉があること自体が自分たちにとっては時代遅れであるが、「過渡期」であるからやむを得ないだろうという空気が、新人たちの世界に充満していたのである。そして、「過渡期」特有の問題は「日本人」になれば解決されるとして、日本語習得や日本の古典研究に余念がない¹²⁸。「朝鮮の国語文学が漸く花を咲かせる頃」が来るのはいつか、などと予想することはしないが¹²⁹、いつか「真の意味の臣民文学が生れることを信じ」、とにかく国語文学「ただひすぢの道があるだけ」¹³⁰と突っ走る。

しかし、この「過渡期」はいつまで続くのであろうか。雑誌終刊となる1945年5月号では、咸南での「新しい読書傾向」（傍点筆者）について、日本語の出版物減少も原因ではあるだろうが、「諺文出版物の売れ行きは一寸凄いやうです」と報告している¹³¹。このように、新しい作家が生まれても時代はいつまで経っても堂々巡りを繰り返すだけとなる。

以上を振り返ると、まず雑誌側は、『国民文学』を日本語版に全面転換したのは朝鮮に徴兵制実施が決定され、「国語」普及運動も進むなかでは、「過渡期的措置」ではもはや「不満足」であるからと説明している¹³²。この背景には、1942年7月号掲載の座談会「軍人と作家・徴兵の感激を語る」で話された、次の論理があると思われる。まず崔載瑞は、「徴兵制実施の準備として」、神仏に対して信仰心のない「朝鮮の家庭生活に宗教を入れること」を考えなければならないと発言する¹³³。それは、崔の発言の次に続く、朝鮮軍参謀馬杉と金鍾漢の以下の発言のような意図があるからである。

馬杉 そこは不思議なもので、有難い有難いと思つてゐる中に本当に有難くなる。

金 しまひには有難さの本質も分かつて来るといふわけですね。面白いですね¹³⁴。

つまり、形式から入ってしまえば自ずと中身もついてくるという論理である。雑誌側の人間たちは、この論理に従えばきつといつか雑誌の方針転換が報われる日が来ると思っていたかのように行動していく。よって、急激な転換をしたために起こった作家不足への懸念や民衆への啓蒙問題などに翻弄されつつも、必死に議論を交わし、対策に取り組む。

¹²⁴ 城山豹「国語文学と私—わが素懐—」（『国民文学』第四巻・第五号）、1944. 5、p.39

¹²⁵ 大島修「国語文学と私—国語文学覚書—」（『国民文学』第四巻・第五号）、1944. 5、p.41

¹²⁶ 南川博「国語文学と私—国語文学と私—」（『国民文学』第四巻・第五号）、1944. 5、p.44

¹²⁷ 同上、p.45

¹²⁸ 金士永「国語文学と私—自戒の弁—」（『国民文学』第四巻・第五号）、1944. 5、pp.36-37

¹²⁹ 大島、前掲書、1944. 5、p.41

¹³⁰ 呉本篤彦「国語文学と私—私の道順—」（『国民文学』第四巻・第五号）、1944. 5、p.44

¹³¹ 平沼文甫「地方文化の陣容—咸南だより—」（『国民文学』第五巻・第五号）、1945. 5、p.22

¹³² 国民文学、前掲書、1942. 5・6、p.44

¹³³ 座談会「軍人と作家・徴兵の感激を語る」（『国民文学』第二巻・第六号）、1942. 7、p.49

¹³⁴ 同上、p.49

作家不足に関しては、新人たちの登場により事なきを得ている。だが日本語に関して、文壇の空気と、雑誌編集の空気と、読者の空気とは全く異なった状況のまま終刊に辿りつく。朝鮮語が必要不可欠である状況のなかで形式だけを整えた結果、いつまでも中身は形式に追いつくことなく、「過渡期」のままで終わったのである。

4. 「人間」を描けない「過程」小説

本章では、『国民文学』に掲載された作品を実際に検証していく。まずは、分析する作品の作者と、その略歴を紹介する。

李石薫（創氏名は牧洋）は、平壤高等普通学校を卒業し、第一早稲田高等学院に入学、翌年退学する¹³⁵。日本語新聞「釜山日報」と、「京城日報」に作品を多く発表し、1943年には『静かな嵐』、1945年には『蓬島物語』という日本語作品集を出した¹³⁶。この論で紹介する『国民文学』上の作品を年代順に並べてみる。「静かな嵐」は1941年11月創刊号に掲載された作品である。そして「夜」は1942年5・6月合併号に掲載された作品である。

金士永（創氏名は清川士郎）は、1942年の朝鮮文人協会の懸賞小説にて初めての日本語小説「兄弟」が佳作当選し、文壇デビューをした作家である。大邱師範学校を卒業後、国民学校訓導をしながら小説を書いていた¹³⁷。同様に年代順に並べると、「聖顔」は1943年5月号に掲載された作品である。「幸不幸」は1943年11月号に掲載された作品である。そして、「細流」は1944年7月号に掲載された作品である。

鄭人澤は、京城帝国大学予科を中退した後に、東京に留学し、帰国後は「毎日新報」記者として勤務していた作家である¹³⁸。1941年11月創刊号の『国民文学』で「清涼里界限」を発表した後も、同誌上に多くの日本語作品を出している。1944年には、日本語作品集『清涼里界隅』を発表している¹³⁹。「かへりみはせじ」は1943年10月号に掲載された作品である。「覚書」は1944年7月号に掲載された作品である。

汐入雄作は、1943年3月号から『国民文学』に作品を掲載するようになった。東京でも作家として活躍していた時代がある¹⁴⁰が、本職は作家ではなく、丸善で働いていた¹⁴¹。同誌上では、3作品発表している。「選ばれたる一人」は1943年12月号に掲載された作品である。

小尾十三は、「登攀」で芥川賞を受賞した作家である¹⁴²。満州の森永製菓にいたが、数年間朝鮮で教師として働いた経歴もある作家である¹⁴³。『国民文学』では、2作発表している。「登攀」は1944年2月号に掲載された作品である。

呉本篤彦は、新人推薦制により1943年9月号から文壇デビューする。4作品を『国民文学』で発表している。「虧月」は1944年4月号に掲載された作品である。「崖」は1944年9月号に掲載された作品である。

奥平修一郎は、南川博とともに、新人推薦制で1944年3月号から活躍していく。『国民文学』には、5作品掲載されている。「配給酒」は1944年7月号に掲載された作品である。

三好富子は、1944年12月号で、新人推薦制により作品を掲載している。『国民文学』で2作品発表している。「足跡」は1944年12月号に掲載された作品である。

一色豪は、小説としては1945年2月号に一作品のみ発表している。「稚鷺」は1945年2月号に掲載され

¹³⁵ 岩波書店辞典編集部編『岩波世界人名大辞典』岩波書店、2013、p.199

¹³⁶ 同上、p.199

¹³⁷ 朝鮮文人協会記「文人協会懸賞小説 選者の感想」（『国民文学』第二巻・第四号）、1942. 4、p.85

¹³⁸ 岩波書店辞典編集部編、前掲書、2013、p.1688

¹³⁹ 同上、p.1688

¹⁴⁰ 湯浅克衛「戦ふ朝鮮作家たち」新潮社『新潮』、1944. 10、p.26

¹⁴¹ 川村研二「朝鮮と『国民文学』」『昭和文学研究』第25集、1992. 9、p.27

¹⁴² 岩倉政治「『登攀』について」（『国民文学』第四巻・第十号）、1944. 10、p.32

¹⁴³ 川村、前掲書、1992. 9、p.27

た作品である。

崔秉一は、当時の新人作家ではないが、『国民文学』には一作品のみ発表している。1944年12月に日本語小説集『梨の木』を発表するほどの作家であるが、生没年は不詳である¹⁴⁴。「本音」は1943年11月号に掲載された作品である。

次に、実際の作品分析に入る。「朝鮮唯一の文芸雑誌」の名のとおり、小説は毎号雑誌の大部分の頁をもって載せられており、小説を書く作家にとっては作品発表の場として貴重な誌面であった。ではそこにある作品はどのような特徴を持っているのか、分析していきたい。

『国民文学』には詩や戯曲も掲載されているが、ここでの分析対象は小説のみとする。取り上げる作品は、時局的、国家的要請に沿う要素を上手く盛り込めず、無理やり取ってつけたような結論に導く歪んだ作品である。つまり登場人物たちが、あまりにもあっさり何の葛藤もなく、皇国臣民としての自覚を持った人間となる小説である。これらの作品は、大部分の批評家が露骨で不自然だとして低評価をつける。

なぜ不自然なのか。それは、「過程」の描き方が雑だからである。ここでいう「過程」とは、皇国臣民になれなかった朝鮮人が改心するまでの意識の流れのことである。この「過程」が反映されず、一足とびに植民地政策に従順となる人物を描く作品は評価が低い。なぜなら、悩んだ末皇国臣民になったというストーリー展開の方がより説得力があり、反対していた人があっさり日本支配を受け入れるという行動は、うわべだけの時局便乗的態度の危険性があるからである。さらに、日本が朝鮮への同化政策を行ない、朝鮮人に「日本の世界観」の樹立を迫っている「過渡期」の時代では、「過程」を描くことでいかにして皇国臣民になるのかを読者に納得させ、努力させることができれば、なによりもの啓蒙・宣伝効果がある。

この「過程」を重視する考えは、小説「父の足をさげて―朴先生のこと―」の主人公の考えから読み取ることができる。まず主人公は、同僚の朴先生が以下のように語ったことを思い出している。

…〔前略〕…我々朝鮮人としてはですね、内鮮一体で行く外ないと思ひます。私もいろいろ考へて見ました。私としてはどうしても、皇国臣民としてやつてゆく外ない思ひます¹⁴⁵。

そして、この言葉に対して下記の感想を述べている。

いろいろ考へて見た、何よりも私には、その一言が嬉しかつた。いろいろ考へて見て、朴先生の到達した結論も結論だが、いろいろ考へて見た、それが、何より私は有難かつた¹⁴⁶。

主人公がなぜこのように考えるのかというと、朴先生が国策にただ追随するのではなく、「悩みからの脱却」を果たし、国家側から危険と見なされることのない完全な信仰心を持った皇国臣民になっているからである。また、結果よりも、その悩むという行為、「理想」へと向かって努力する「過程」自体にも意味を見出す支配者の心理があるからである。

では、この「過程」を描くには作品にどのような要件が揃っていなければならないのか。それは、主に三つある。登場人物が皇国臣民になりきれないでいる抵抗精神を書くこと、なりきれないことに葛藤し、悩むこと、そして最後に、その悩みから脱却するきっかけや理由を明確に示し、登場人物が皇国臣民として目覚めること、の三つである。この三点の揃うものが、要求される作品である。しかし、三点

¹⁴⁴ 三枝寿勝「三枝寿勝の『韓国文学を味わう』 第七章 解放前までの文学」国際交流基金アジアセンター、1997、<http://www.han-lab.gr.jp/~cham/ajiwau/chap7/chap7.html> (2015.03.28入手)

¹⁴⁵ 宮崎清太郎「父の足をさげて―朴先生のこと―」(『国民文学』第一巻・第一号)、1941.11、p.225

¹⁴⁶ 同上、p.225

を自然な形で作品に反映することは容易ではない。よって、三要件があるかないかで作品を見ることで、理想と現実にはずれがあるということを明らかにしていきたい。

また、皇国臣民へと変化していくには様々なルートがあるので、そのルートごと作品を分けて考えていくことにする。

一つ目は、思想的に抵抗精神があったり、徴兵に反対する朝鮮人が改心したりするパターンである。日本人（もしくは既に皇国臣民と化している朝鮮人）が朝鮮人を教諭していくいわゆる「〈教化〉物語」¹⁴⁷が、このパターンに多く当てはまる。作品としては「静かな嵐」、「夜」、「本音」、「選ばれたる一人」、「登攀」、「昇天記」が当てはまる。

二つ目は、子を死なせたくないと思っているであろう親が、子の志願兵行きを許し、むしろ奨励するパターンである。「聖顔」、「覚書」、「崖」、「稚鷲」が当てはまる作品である。

三つ目は、最初から露骨に戦争へ行くことを望む、もしくは生産現場で働きたがる、「過程」が全く描かれないパターンである。「かへりみはせじ」、「虧月」、「足跡」が当てはまる。

四つ目は、働くことが面倒だと感じていたり、働くのが困難であったりする人が、働き者の労働者になるパターンである。「聖顔」、「細流」、「配給酒」、「足跡」が当てはまる作品となる。

ここでは、それぞれのパターンから一つ小説を取り上げて、どのように「過程」を表現しきれていないのか、具体的に見ていく。

まず一つ目として、「本音」を取り上げる。この小説のあらすじ¹⁴⁸は次の通りである。町連盟を単位に作られている青年訓練隊の指導員である主人公・崔は、訓練に参加している国本東燮の態度に注目する。彼は号令に対して完璧な姿勢を取るが心がこもっておらず、ただ形式的に行なっているだけであったからである。国本は訓練に遅刻したり、訓練中に煙草を吸ったりするなど、反抗的とも取れる態度を表す。しかしある日、その国本が崔の家を訪ねてくる。国本は、今どうすべきかわかっているのに、心が反発してあのような自堕落な行動を取ってしまうがどうすればいいか、と悩みを打ち明けてくる。崔は、どうすればよいかは分からないが、今は転換期で仕方がないことだから、信念を持つように鍛えなさいと諭す。だが国本の態度は変化せず、遂に崔も国本を殴ってしまう。その事件以来お互いがお互いを避けるようになるが、国本が青年隊のことだけでなく恋愛に悩んでいた事を知る。そして崔が国本が存在すら忘れかけた頃、国本が徴用で軍港に行くことを耳にする。悩みは全て拭かれた、と生き生きと語る国本と、崔と一緒に笑い合うところで小説は終わる。

この小説では、国本東燮が時局的な問題などに悩みを抱えている。彼は、皇国臣民にならなければならないとわかっているのに、青年隊の訓練で反抗的な態度を取ってしまうのは「素直になれない」¹⁴⁹からだと説明している。実際に、どのようにその悩みを解決すればいいのかは、主人公にもはっきりとはわからない。そして突然国本は皇国臣民となって現れるのである。「解決を持たない生活に追はれ」たが、「解決を見出すべく暗中模索した」¹⁵⁰国本は、軍港への「一枚の令状で凡てが拭かれた気持である」¹⁵¹と語っているが、彼が「悩み抜いた」¹⁵²というその「過程」での変化は何も語られていない。ただ、恋愛の問題と青年隊の問題が関連しているのでは、という憶測が語られるのみである。したがってこの小説では、具体的な悩みは描かれるものの、解決に至った理由が不鮮明であり、「過程」を描いているとはいえない。

次に二つ目として、「覚書」という小説のあらすじ¹⁵³を紹介する。父親が家を出たために、母一人子一

¹⁴⁷ 鄭百秀『日韓近代文学の交差と断絶—二項対立に抗して』（明石ライブラリー）、明石書店、2013、p.169

¹⁴⁸ 崔秉一「本音」（『国民文学』第三巻・第十一号）、1943. 11、pp.95-112

¹⁴⁹ 同上、p.103

¹⁵⁰ 同上、p.110

¹⁵¹ 同上、p.110

¹⁵² 同上、p.110

¹⁵³ 鄭人澤「覚書」（『国民文学』第四巻・第七号）、1944. 7、pp.85-99

人で生活しなければならず、その経験から主人公・西原淳一は偉くなって母を支えたいと思うようになる。そのためだけに西原は勉学にいそしみ、母もまた、息子を大学へ行かせるために働き詰めの毎日を送る。ところがある日、友が徴兵されるのを間近に見た瞬間、西原は母のことすら忘れて自らも兵になりたいという思いを抱いた。そこから、母に志願兵にさせてくれと頼むか、諦めるかの二者択一に悩むことになる。そして志願締め切りの前日、懇意にしていた友達の小父の所へ行くと、母が西原を志願させることにあっさり賛同していたという話を聞かされる。偉くなる、ということは、高位高官に登ることではなく、兵隊になって死ぬことだと母は説く。西原は母を支えることなど忘れ、死んでみせると息を巻いている。以上で物語は終了する。

ここで着目する点は、親側の気持ちの変化である。西原の母は、西原に「黙って勉強して、偉い人になつて」¹⁵⁴ほしいと、「夜の目も寝ずにミシンに嚙りついて」¹⁵⁵働き、大学へ行かせる。ここから、一人息子を手塩をかけて育てている様子がわかる。それにも関わらず、西原が志願兵になりたいということに関して、全く葛藤を抱いていない。それどころか、『志願させますとも』と「言い切つて微笑」¹⁵⁶、息子の背中を押している。このように、母が息子を兵隊に送ることに対しての不安を描かなかったということは、この小説の不自然な部分となっている。なぜなら、皇国臣民になりきれない精神や悩み、その悩みからの脱却という「過程」を描くことなく、そのまま当時の『世界一のお母さん』¹⁵⁷像となっているからである。

ここからは三つ目のパターンに当てはまる「かへりみはせじ」のあらすじ¹⁵⁸を紹介する。この小説は全て、兵隊となった主人公から母と弟への手紙形式で書かれている。日本語があまり理解できない母への言葉は、ひらがなと簡単な漢字を使って書き、日本語のわかる弟への呼びかけの時とは文体を変化させている。まず手紙は、戦地に居る間に母のことが急に思い出され、母と話をしたくなったので手紙を書くことにした、という趣旨のことが書かれる。そこから母に対して、国の為に死ぬことがどれだけ重要なのかを訴え、自分が死んだ後に母がどのような行動を取るべきかを具体例を挙げて説明していく。そして、弟に向けて兵隊になるように激励をした後に、再び母に向かって語りかけ、死に場所を探しているところだと報告する。そして、志願兵行きに反対したかつての母を非難し、母としての務めを再度語り、カタカナが大半を占める遺書で締めくくっている。この遺書の部分に関して作者は、実物を真似したと最後に付け加えている¹⁵⁹。

以上が「かへりみはせじ」の概要であるが、この小説は当時の日本の、「理想」の母親像を息子の口から語らせることによって説こうとした意図が明らかに表れている。そして同時に、考え方、行動など全てが模範的な志願兵の姿をも描き出している。しかし最初から完璧な皇国臣民であり、悩みも葛藤もなく、「過程」を微塵も感じさせない人物を描き、親がなすべきことを説明しているだけでは、ただ読み手に対する説教となるだけである。このように「かへりみはせじ」は、国策を宣伝しようとするあまり、極端な人間を描いたことが欠点となる。

最後に、小説「細流」を取り上げる。あらすじ¹⁶⁰は、以下の通りである。^{バムコル}栗谷という村は、両班がいた華やかな時代と比べると悲惨な状態であり、それでも怠惰の為村人たちは働かないので不作が続いていた。しかし、両班の血筋を引く65歳の圭午老人が池工事を主導してからというもの、見違えるほど皆が働き者になった。この老人も、かつては酒飲みで妻を悩ますなど、だらしない人間の典型であったが、息子たちが「働く者を白い目で見ると村の伝統」に愛想をつかして村を出ていったことをきっかけに

¹⁵⁴ 同上、p.92

¹⁵⁵ 同上、p.95

¹⁵⁶ 同上、p.97

¹⁵⁷ 同上、p.98

¹⁵⁸ 鄭人澤「かへりみはせじ」(『国民文学』第三巻・第十号)、1943. 10、pp.30-53

¹⁵⁹ 同上、p.53

¹⁶⁰ 清川士郎(金士永)「細流」(『国民文学』第四巻・第七号)、1944. 7、pp.32-50

酒をやめ、村に水を引くという大工事の計画を立て始める。そして、少し働いただけでも倒れそうであるにも関わらず、老身に鞭を打って働き者の典型となった。最後に、両班という家柄に捉われず国のために働くことの大切さを訴える息子からの手紙に感動し、「働くことこそ最も大切なことである」と気持ちを新たにするのである。

この小説は、1944年8月号の「生産面特集」のカテゴリに属する、生産文学である。よって労働の現場を描くことになるが、65歳の圭午老人や69歳の妻までもが、肉体労働に異常なまでに執着している姿は、不自然である。確かに、働きたいと願う若い世代の息子が『お父さん、内地に行かしてください』¹⁶¹と頼んだ時に反対したものの、息子が出て行ってしまったことに対する反省をし、この怠惰な現状をどう打開するか悩む場面は描かれている。しかし、あまりにも簡単に村人たちを丸めこみ、総動員体制を作り上げ、彼らが「土を掘る事や運ぶことの外には考へる事も」¹⁶²しない思考停止の状態にただ仕事に打ち込む姿を描いている。池工事に反対する住民たちとのいざごさは、老人の家柄の権威と根回しが間接的に功を奏し、解決に導いている。さらに息子からの説教に素直に納得し、完全な皇国臣民へと変っている。以上のようにこの小説では、老人たちの極端な変貌ぶりと、悩みからの脱却を簡潔に終わらせたことが、「過程」を描き切れていない原因になっている。

以上具体的な作品で、理想的な皇国臣民と向かう人間たちの心の「過程」がどのように描かれているか検討したが、全て無理やり皇国臣民にさせるような展開にするか、全く描かないかのどちらかであり、説得的な小説とはなっていない。

最後に、これらの作品に対して誌面上でどのような評価が下されているかを見ていく。上述で挙げた作品に対しては、同じ『国民文学』誌上にて大部分が酷評されている。そして評価者たちは、評価の低い理由を、「人間」ではなく、「概念」¹⁶³、「理想」¹⁶⁴を書いているからだと説明する。「人間」を書くとはどういうことかということ、悩み苦しむという生々しい人の姿を描くということである。それに対して「概念」、「理想」を書くということは、「～すべきである、～でなければならない」という説教を書くことである。

悩み、苦しみを描くべきだ、ということは1941年11月創刊号の座談会から問題となっていたことであった。「作家と時代の苦しみ」という題のついた記録では、作家は「時代の苦しみ」を描くべきか否か、ということについての議論が見られる。朝鮮文人協会幹事長の芳村香道が、「時代の苦しみ」は表に出す必要はない、と述べたところ、崔載瑞がそれでは「薄つぺらなものにしかならない」と反論する¹⁶⁵。ここでの「時代の苦しみ」とは、朝鮮人があくまでも差別され続ける「日本人」になること、皇国臣民になることを強いられ、その「理想」に向けて進んでいかなければならない時代の朝鮮人の心の葛藤のことを指すと思われる。そして、この問題に対して李源朝と白鉄は以下のように語る。

李 芳村さんの言はれたのは白君と一寸違つてゐるのではないかと思います。苦しみと言つた場合、本当に苦しいことではなくて、苦しみの中に楽しさを感じる苦しみと思ひますが、芸術なり偉大な時代の生れる前夜の苦しみ、さういふことも言へると思ひます。

白 芳村さんの言はれたことは実際の話かも知れませんが。今は本当の文学を書いても認められさうもないから…。その本当の時代の具体的なものは書けない。その苦しみを通じて目的に到着しなければならぬ。然し真実な文学を打樹てるには生活様式なら生活様式が現在統一されつゝあるときにはそれがあるがまゝの過程を描くことがほんとうでせうね。あまり現実の過程を飛躍して統一さ

¹⁶¹ 同上、p.43

¹⁶² 同上、p.35

¹⁶³ 趙演鉉「わが文学精神—自己の問題から—」(『国民文学』第三巻・第八号)、1943.8、p.29

¹⁶⁴ 金鍾漢「新しき史詩の創造」(『国民文学』第二巻・第七号)、1942.8、p.22

¹⁶⁵ 座談会「朝鮮文壇の再出発を語る」(『国民文学』第一巻・第一号)、1941.11、p.83

れたものに行つてしまふと抽象的な文学にしかねないと思ひます¹⁶⁶。

つまり、李源朝は皇国臣民になりたいという「楽しい」感情があるが、なりきれない、という「過程」の中での苦しみという意味で取るべきだと述べる。そこで白鉄は、「本当の文学」、つまり植民地の民族として、帝国に同化させられるという苦しみを描く文学は認められない、とした上で、描くべきは「理想」、「目的」に到達するまでの苦しみだと述べる。その「過程」を描く上で飛躍をしてしまうと、「人間」を描いていない、と批判されてしまうのである。

以上のように、「人間」を描くとはどういうことなのか、雑誌創刊当初から議論されているのである。また、「概念」を描くことも批判され続けていた。1942年11月号の「国民文学といふもの」では、以下のように述べられている。

文学といふものが、若し、一片の説教によつて出来上り得る程容易なものであるならば、作家は一冊の思想事典を用意することによつて、ありとあらゆる種類の文学作品を立ちどころに産み出し得る筈である¹⁶⁷。

つまり、説教を書くのは事典に載っている文章をそのまま写してくることであるので、文学ではないと批判しているのである。

では、上記で紹介した作品は、「概念」ではなく「人間」を描いているのであろうか。雑誌評価とともに見ていく。

まずは「本音」であるが、この作品は雑誌内では、具体的な評価はされていない。しかし、軍人を描く作品について、忠告がなされていることは注目すべきである。1944年8月号の「徴兵と文学」では、「軍人や軍事を取扱ふ作品が、稍々もすれば概念的、類型的に流れ、話が綺麗ごとで終ると云ふことは、大いに警戒すべき」¹⁶⁸としている。そして、「文学が如何に軍事化されようとも、その中心的な興味が人間にあるのは変りない」¹⁶⁹と、「人間」を描くことを作家たちに要請している。

「本音」では、国本は徴用で軍港に行くこととなり、軍事の道に進むことになるが、その際に以前まで抱えていた悩みが、全て吹き飛んだという「綺麗ごと」に終っている。悩みを描ききれずに、結局「概念」で締めくくられてしまったのである。

次に、「覚書」についての評価を見ていく。「徴兵と文学」では、朝鮮に徴兵制が布かれ、「生存の支柱として、あらゆる望みをかけた息子が兵隊に取られる」という大問題に対して、朝鮮の母親達は「頭の切替へを短時間に成し遂げ」たとして称賛している¹⁷⁰。そして、このような状況が現実にあるのだから、文学では「さうした見事な成績に到達するまでの様々の心理的経過と云ふものをもう少し克明に」出すべきであると続ける¹⁷¹。よって、「覚書」における評価としては、「余りにあつさり」しており、「物兄りなさを感ずる」と批判する方向に傾いている¹⁷²。確かに、母親は息子の志願兵行きを、心の葛藤もなく綺麗に受け入れている。呉龍淳は、この場面に「論理の飛躍」があり、「作者のイージーゴーイング」であると批判している¹⁷³。そして、この「心理的経過」、つまり「過程」を描かないということは、「人間」を描いていないということになるのである。

¹⁶⁶ 同上、p.84

¹⁶⁷ 兪鎮午「国民文学といふもの」(『国民文学』第二巻・第九号)、1942. 11、p.4

¹⁶⁸ 石田耕造「徴兵と文学」(『国民文学』第四巻・第八号)、1944. 8、p.14

¹⁶⁹ 同上、p.14

¹⁷⁰ 同上、pp.13-14

¹⁷¹ 同上、p.14

¹⁷² 同上、p.14

¹⁷³ 呉龍淳「文芸時評—作家の眼—」(『国民文学』第四巻・第八号)、1944. 8、p.41

続けて、「かへりみはせじ」の評価について見ていく。「かへりみはせじ」が掲載された1943年10月号の「後記」では、この小説では「朝鮮の最もぞみ多き世代の新しい精神形成」が描かれており、「朝鮮に於ける本格的な戦争文学の一つの魁」と絶賛している¹⁷⁴。しかし、1943年12月号「決戦下文壇の一年」では、主人公は「模範兵に違ひない」が、その手紙に「さ程の感動を受けない」のは、「話全体が結構づくめ」であり、「概念的であり過ぎた」からだとして低評価をつけている¹⁷⁵。つまり、「辛い体験」¹⁷⁶を描かずに理想的な人間を描いたために、手紙の内容が非現実的になっているのである。呉龍淳による批評では、「かへりみはせじ」に「啓蒙的な価値」を認めているが、内容については「常識的」で「冗漫」であるとやはり低評価をつけている¹⁷⁷。「啓蒙的な価値」というのは、読者に感動を与えて国策的思想を悟らせるのでない限り、説教となる可能性を秘めている。よってこの作品も、「人間」を描かない作品となるのである。

最後に、「細流」の評価を考えていく。この作品についても、呉龍淳が作品評価を試みている。それによると、「細流」は「ありの儘に見るすなほさが無」く、「作者の主観で事実を誇張拡大してゐる」というのである¹⁷⁸。これはつまり、作物が豊富にできる環境にいるにも関わらず働くことに怠惰を感じ、働く者を排除するような雰囲気のある村を描いていることであると思われる。これほどまでに人間の怠惰を誇張して書いていては、不自然に映るのも当然である。さらにその影響もあって、人間の性格描写も失敗していると続けている¹⁷⁹。圭午老人の極端な変貌ぶりは、ともすれば老人は二重人格の人物なのだろうかと受け止められる可能性があるのである。さらに「六十九と六十五の老人夫婦を働かせ過ぎ」ていたり、「酒を飲ませ過ぎ」ていることに読者は納得できないと述べる¹⁸⁰。これらの評価は、作者が、働き者となった老人の「過程」を描くことに失敗していることに起因する。

さらに、圭午老人が最後に受け取る息子からの手紙について、評者は以下のように指摘する。

…〔前略〕…この作者にぼつぼつ見え出して最近の傾向だが言葉で主題の意味を説明しようと試みるやり方である、この作品に於ては、北海道の炭鉱に行つた次男坊が手紙で父親を説教するところである。小説が肉と血のながれをもつ具象的なものである以上、主題の意味を観念や理屈で説明してはならない。動きと動作で暗示すべきである、作者のかういふ試みは再考を要すべきではなからうか？¹⁸¹

以上の通り、国策宣伝を盛り込んだかのように国のために働くことを説く手紙は、説教以外の何物でもないのである。そして、説教を書いているということは、「概念」のみ取り上げているということになるのである。

作品を通して具体的な評価を見てきたが、一貫して否定的な評価の理由は、「人間」ではなく「概念」を書いているということであった。創刊号から既に議論され、例えば1943年1月号の対談¹⁸²など、その後も主張され続けていた悩み、苦しみを描く必要性は、作品に一向に反映されていない。では、なぜ作家たちは描けなかったのであろうか。それは、作家自身が「過渡期」という時代の苦しみのなかにおり、悩みを解決する方法がわからなかったからである。小説「本音」において、国本東壘が主人公・崔に、「転換期」での悩みをどう処理すればいいかと尋ねた際に、崔が「僕もはつきりわかりません」と述べた

¹⁷⁴ 「後記」(『国民文学』第三巻・第十号)、1943. 10、広告頁 (p.149) 後

¹⁷⁵ 石田耕人「決戦下文壇の一年―特に創作にみる―」(『国民文学』第三巻・第十二号)、1943. 12、p.14

¹⁷⁶ 同上、p.14

¹⁷⁷ 呉龍淳「現実への態度―『清涼里界限』について―」(『国民文学』第五巻・第三号)、1945. 3、pp.42-43

¹⁷⁸ 呉、前掲書、1944. 8、p.44

¹⁷⁹ 同上、p.44

¹⁸⁰ 同上、p.44

¹⁸¹ 同上、p.44

¹⁸² 対談「文化と宣伝」、前掲書、1943. 1、p.84

ように¹⁸³、自分自身でさえも明確な解決法を見つけていないので、作品にも反映できなかったのであろう。

5. おわりに

本論では主に、雑誌『国民文学』の混乱した様相を見てきた。そこで、この混沌とした雑誌『国民文学』が現れた要因を、その状態を象徴する詩とともに説明することで終章としたい。

まず挙げる詩は、金鍾漢の「合唱について」である。金鍾漢（1914-1944）は、日本大学専門部芸術科を卒業後婦人画報社等で勤務し、『国民文学』の創刊当初から編集者として活躍した¹⁸⁴。『国民文学』では崔載瑞の下で編集の中心に携わっているが、1943年7月号をもって雑誌を離れることとなる。その後も座談会や詩の掲載などで誌面に登場することもあったが、1944年9月に死去する。戦争の終結を見ることもなく、植民地期に詩を書き続けた詩人である。以下ではその金鍾漢の、『国民文学』1942年4月号に掲載された「合唱について」の内容を考察していく。詩の全文は次のとおりである。

合唱について 金鍾漢¹⁸⁵

君は 半島から来たんぢやないですか
道理で すこし変つた貌かほをしてゐると思つた
でも そんな心細い想ひをすることはいいですよ
ほら 松花江ソンカリイの上流からも はろばろ
南京の街はづれからも 来てゐるではないか
スマトラからも ボルネオからも いまには
重慶の防空壕からも やつて来るでせう
では みんな並んで下さい ―おお
砲口のやうだ 整列した・口・口・口・口・口・口・口・口
それは 待つてゐる 待ちあぐんでゐる
タクトの指さす方向へ 未来へ
やがて 声の洪水が発砲されるでせう
くりひろげられた 煙幕のやうに
餘韻は渦巻いて 渦巻いて流れるでせう

このステエジの名を 君は知つてゐる
このステエジの名を 私も知つてゐる

ほら タクトが上つたではないか 指揮刀のやうだ
(もはや 私には云ふべき言葉がない)
ただ 歌ふことだけが残されてゐる 声を限りに
ただ 歌ふことだけが残されてゐる

¹⁸³ 崔秉一「本音」(『国民文学』第三巻・第十一号)、1943.11、p.103

¹⁸⁴ 岩波書店辞典編集部編『岩波世界人名大辞典』岩波書店、2013、p.701

¹⁸⁵ 金鍾漢「合唱について」(『国民文学』第二巻・第四号)、1942.4、pp.40-41

この詩は、表面的には、金鍾漢自身が述べるように「大東亜の建設に参加する半島人の風貌と感激とを壁画し」¹⁸⁶ている。この説明だけでは単なる国策推進の詩だと判断されるおそれがあるが、実際は別の事柄が象徴されている。

まず詩の冒頭で、一人の朝鮮人が、ある「ステエジ」に誘われる。この「ステエジ」とは、「大東亜共栄圏」の民族なら誰もが乗っていなければならない、日本の戦時総動員体制という名の舞台である。皆が参加しなければならないのだから、「心細い想ひをすることはないですよ」となだめられ、「ステエジ」へと上がる。

この一定の枠内、一定の「ステエジ」の上では、口を開けて、何を言おうと構わない。「洪水」のように一斉に、雑多な意見が主張されることが予想される。体制に反抗的な意見でさえも、「ステエジ」上では許されるのである。むしろ、反抗的な人間も必要である。この理由は、1944年6月号に掲載されている「文芸時評」の、以下の記述から読み取ることができる。

元来現実と云ふものは肯定的な要素と否定的な要素とは必ず孤立しては存在出来るものではないので、美と醜、善と悪、天使的なものと悪魔的なものと云った様なものは必ず何等かの割合で共存する。これが現実であると云ふことは近代写実主義のABCである。朝鮮の現実も同様であつて宮崎氏がそう云った薄暗い部分をもともかく見のがさなかつたと云ふことは何と云つても手柄であらう¹⁸⁷。

上記の宮崎清太郎が「恐る恐る」¹⁸⁸描いた「薄暗い部分」とは、小説「その兄—学兵列車—」で、出陣学徒が軍歌ではなく、アリランという朝鮮の民謡を歌っている場面のことである¹⁸⁹。朝鮮民謡を歌うことは、民族主義者として見られる可能性があり、案の定日本人の主人公も不快に思っている¹⁹⁰。そのような負の面を出せば検閲に引っ掛かる危険性があるにも関わらず、この場面を描いたということは称賛されている。なぜなら、光もあれば闇もある現実を示した方が説得力があるからである。

したがって、もし、光り輝く露骨な国策的発言しか許されていない和音合唱の「ステエジ」であったなら、誘われた人は躊躇し、反発し、「ステエジ」にすら乗ろうとはしないであろう。「ステエジ」から出ようとする反抗的態度は厳しく弾圧し、検閲する。だが「ステエジ」内の闇である「あくどい思想面」は、小尾十三の小説「死の設定」に登場する主人公の教師が、時代に反抗精神を持っていると疑われた生徒をかばい、温かい目で見守ったように、諭すような、なだめすかす自信があるかのような「寛容の愛」で包むのである¹⁹¹。

いよいよタクトが振り上げられれば、騒がしいだけで何の結論も見出せない、不毛なやりとりを表す不協和音の合唱が始まる。「大東亜新秩序に於て中心となる」¹⁹²天皇や日本精神を象徴するタクトが指揮する方向、つまり戦争遂行、「大東亜」建設へと向かう政策に従いながら、雑音の合唱を繰り返し、渦を巻くほど混沌とした時代の雰囲気「ステエジ」上に作ればいい。それだけが、舞台上に乗っている者たちの役割であり、使命である。

以上の分析のように、「合唱について」という詩は、『国民文学』で、ひいては戦時下の世界全体で起こっていた現象を象徴していると思われる。また、この現象の中でもがき苦しむ人間にスポットを当てた詩が、金鍾漢による「新しき詩史の創造」に載っている。この詩は、シェイクスピアの「マクベス」第5幕第5場の19行から28行の大意であると述べられている。以下は、掲載された箇所全文である。

¹⁸⁶ 金鍾漢「新しき詩史の創造」(『国民文学』第二巻・第七号)、1942. 8、p.21

¹⁸⁷ 一色豪「文芸時評」(『国民文学』第四巻・第六号)、1944. 6、p.41

¹⁸⁸ 同上、p.41

¹⁸⁹ 宮崎清太郎「その兄—学兵列車—」(『国民文学』第四巻・第四号)、1944. 4、p.61

¹⁹⁰ 同上、p.61

¹⁹¹ 小尾十三「死の設定」(『国民文学』第四巻・第十号)、1944. 10、p.83

¹⁹² 崔載瑞「大東亜意識の目覚め—第二回大東亜文学者大会より還りて—」(『国民文学』第三巻・第十号)、1943. 10、p.139

明日、また明日、さらにまた明日と
時は日ごとにじりじりと這つてゆき、
たうとう最後の一分にまで達する。
そして昨日とすぎた時が馬鹿者どもを
墓穴へ導く。消えろ、消えろ、短い蠟燭、人の一生は
歩いてゐる影だ、憐れな役者だ、
持ち時間だけ舞台でのさばりかへり、
やがて何も聞こえない。痴人の話みたいで、
いたづらに声ばかり騒がしくて、
たわいもないものだ¹⁹³。

このように、「短い蠟燭」として表現される「憐れな役者」であり、「いたづらに声ばかり騒がし」い不協和音の中で、「たわいもない」ことを話すだけの「痴人」のような「天才的」¹⁹⁴「英雄」¹⁹⁵たちの存在に気づいていた金は、以下のように述べる。

…〔前略〕…最悪の場合があつて大東亜といふものがひとつの国民の夢に終つたとしても、それを希求してやまなかつた『人間』たちの国民としての生命力と真実は、永遠につながる詩的美しさとして残りうると考へてゐる。／…〔中略〕…私の考へでは、国民の理想といふものは時代と必要に応じて何時でも変へうる現象的なものであり、それを希求し、設計してやまない人間（国民）の生命力と真実にこそ、永遠につながる本質的な美しさがあると思ふ…〔中略〕…¹⁹⁶。

上述のとおり、金は「国民の理想」を追い求める人間の「詩的美しさ」を訴えるが、自身も含まれているであろう有名「無名の英雄」¹⁹⁷や「集団」¹⁹⁸の中の人間たちは、あくまでも「憐れな役者」である。しかし金は、「時代と必要に応じて」如何ようにも変化していき、結局「夢」に終わるかもしれない「理想」に向かつて、骨折り損の努力をし続ける被支配者側の人間の悲しい姿に、少しでも意義を見出そうとしていた。だからこそ、その「生命力と真実」には、「永遠につながる本質的な美しさがある」と称賛したのだと考えられる。

そして実際に、『国民文学』誌に登場する「英雄」たちはもがき苦しんでいる。文学の指導理念はどんな作品が生まれれば達成されるのか、といった終わりの見えない議論が続き、疲弊する。作家はどこまでいけば皇国臣民、戦時下国民の意識を持ちえたと言えるのかがわからず、考えれば考えるほど作品の水準が下がっていく。日本語はどのレベルになったら使いこなせるようになったと言えるのかは誰にもわからず、他人や自分の日本語の言葉づかいに関して神経を尖らす。一体いつになったら、朝鮮人は、差別を受けることのない「完全な日本人」¹⁹⁹になるのかなど、およそ絶望的な問いである。

それらの問題に関しては、客観的な指標も答えも始めから存在しない。あるのは、崔載瑞のように、創氏をし、朝鮮神宮へ参拝したら「日本人」となることがどうということかわかったと宣言したり²⁰⁰、徴兵制実施が決定されれば、全面日本語雑誌に転換する準備が整ったと主張したり²⁰¹する滑稽な自己主張

¹⁹³ 金鍾漢「新しき史詩の創造」（『国民文学』第二巻・第七号）、1942. 8、p.22

¹⁹⁴ 同上、p.22

¹⁹⁵ 同上、p.21

¹⁹⁶ 同上、pp.21-22

¹⁹⁷ 同上、p.21

¹⁹⁸ 同上、p.21

¹⁹⁹ 鄭百秀『日韓近代文学の交差と断絶—二項対立に抗して』（明石ライブラリー）、明石書店、2013、p.173

²⁰⁰ 石田耕造（崔載瑞）「まつろふ文学」（『国民文学』第四巻・第四号）、1944. 4、p.5

²⁰¹ 国民文学「国語雑誌への転換」（『国民文学』第二巻・第五号）、1942. 5・6、p.44

のパフォーマンスのなか、結論が見いだせず「不協和音」で騒ぎ出す混乱状態だけである。

しかしその混乱状態は、むしろ当初から望まれたものであったとも考えることができる。結論が見えず、矛盾を含んだまま議論が終ろうとも、達成は遙遠で、途中で目標が次々に変ろうとも、それが問題になることはない。たとえ「英雄的」被支配者たちの主観的達成が容易に得られず、空しい徒労を繰り返しているとしても、＜文学＞を操る支配者は一向に構わないのである。なぜなら、被支配者たちがもがき、悩むという時代の雰囲気を作ること、彼らが完璧な「理想」に向かって努力する「過程」を示すこと、つまり「理想」への「過渡期」の状態に居させ続けることこそが、植民地支配や戦時下体制を維持していくための必須条件であり、支配者の求めている「理想」であるからである。『国民文学』の真の目的はこうした永遠に到達できない自己努力と自己懊悩の騒がしい「過程」を作り上げることであり、『国民文学』が迷走し、混沌し続けられし続けるほど、その目的はおのずと達成できるのである。雑誌『国民文学』が生み出された背後には、こうした高度な政治的意図が垣間見られ、それに多くの朝鮮人文学者たちが絡めとられ、膨大な精神的空虚を誠実に作り上げつつ、自己の精神的傷痕を生真面目に残すという無残で痛ましい結果を招来したと言える。

【付記】本論は松下玲音氏の卒業論文の一部として書かれたもので、南富鎮は指導過程において助言や資料提供などを行ったにすぎない。おおむね松下玲音氏の業績とみなしてよい。